

「パノラマ」、あるいは窓を開くエメ・セゼール —1944年の反「独立」をめぐる—

福島 亮

要旨

Juste après la fin de l'Antan Robè, gouvernement vichyste aux Antilles Françaises sous la direction de l'amiral Robert, Aimé Césaire a écrit dans un numéro de *Tropiques* : « je condamne toute idée d'*indépendance antillaise* ». Cette déclaration est étonnante parce que l'on sait qu'il a critiqué le colonialisme. Le présent travail tente d'analyser cette attitude paradoxale césairienne en examinant « Panorama ». Au cours de cette période, on sait que Césaire a publié ses textes comme autant de combats culturels et qu'après la guerre il a franchi le seuil d'un combat politique dont le fruit est la loi de départementalisation de 1946. Mais peut-on séparer ces deux aspects? Cette interrogation nous amène à découvrir que Césaire nous propose une pensée hétérogène. Pour tenter de l'analyser, nous devons d'abord constater la situation antillaise sous le robertisme. Ensuite nous observerons plus attentivement « Panorama », notamment en nous focalisant sur le thème de « l'air » qui contribue à la force poétique et politique du texte. Enfin, nous verrons qu'il s'agit, pour Césaire, dans la période d'après guerre d'ouvrir la Martinique à son propre passé, mais aussi à l'avenir républicain et de proposer, dans ce but, une nouvelle vision du monde, partagée entre le politique et le poétique.

キーワード : エメ・セゼール, カリブ海地域, ヴィシー政権, 国民革命

1. はじめに

詩人であると同時に政治家でもあったエメ・セゼール (Aimé Césaire, 1913-2008) における詩的なものと政治的なものの関係、言い換えるならば文学的想像力と現実を動かす諸力の関係についてはすでに多くのことが語られてきた¹。とりわけ、1946年の県化法案や1956年のフランス共産党からの離党、また60年代に苛烈な火を噴いた民衆による独立闘争と彼の文学的想像力の連関についてはすでに多くの研究が存在する²。

本稿が分析の対象とするのは1940年代前半であり、この時期、セゼールはまだ政治家になっていない。私たちが考えたいのは、詩人・政治家としてのセゼールについてではなく、いかにしてセゼールの文章の中で詩的なものと政治的なものをめぐる問題系が立

ち上がるのかという点である。私たちが仮説として照準を定めるのは、1940年から1945年である。この期間は二つの構成要素からなる。一つは仏領カリブ海地域がヴィシー政権下にあった1940年から1943年7月までであり、もう一つは同地域が国民解放委員会に帰属を表明する1943年7月以降である。これから見ていくように、この期間、とりわけ比較的自由に言論が行えるようになった1943年7月以降においてセゼールの書いた文章の中で詩的なものと政治的なものが具体的な態度決定の次元で意識されるようになる。もちろん、セゼールにとって詩的なものと政治的なものという二つの概念は、1930年代から彼の晩年までを貫くものであり、1940年代前半だけに限定されるものではない。しかし、この二つの概念が切迫しつつ結びついたのは、ヴィシー政権による支配から戦後の共和政へと本国の政治的状況が流れを変えていくまさにこの1940年代前半だったのではないか。

ヴィシー政権下の時代を、マルティニックでは提督の名前をとって「ロベール時代」^{アラン・ロベール}と呼ぶ。この「ロベール時代」のセゼールに関する研究は少ない³。「ロベール時代」は厳しい言論統制が行われており、加えて物資が不足していたために、資料が限られていることが原因である⁴。本稿ではセゼールが1941年から1945年にかけて刊行していた雑誌『トロピック』(以下『トロピック』)のうち、1944年2月に掲載された「パノラマ」と題された文章に注目する⁵。『トロピック』に掲載されたセゼールの詩作品は後に詩集『奇跡の武器』に収録され、複数の研究がなされている⁶。しかし、詩集に収録されることのなかった「パノラマ」はこれまでほとんど研究されてこなかった⁷。

以下では、まず「ロベール時代」の言論状況について概観し、次いで「パノラマ」を読解することで、この時期セゼールにとって詩的なものと政治的なものがどのような形で立ち現れるのか確認していきたい。

2. 国民革命と雑誌『トロピック』

ヴィシー政権下のフランス本国で行われた政策は「国民革命」と呼ばれる。「国民革命」について包括的な研究を行った川上によれば、それはヴィシー政権の成立以前からフランスに存在し、「その特徴は、議会共和政と資本主義を否定し、強力な指導者のもとに『秩序と権威』を回復するという、フランスの典型的な右翼的思想潮流にほかならなかった⁸」。

「国民革命」という言葉の初出は明らかではないが、ヴィシー政権との関係で重要なのは1924年にジョルジュ・ヴァロワによって著された『国民革命』というタイトルの書物である。ヴァロワは、「アクション・フランセーズ」の活動に参加し、ファシズム論を唱えた活動家である。「アクション・フランセーズ」は1894年のドレフュス事件をきっかけとして1905年に設立された右翼団体であり、ヴィシー政権の思想的支柱の一つとなるシャルル・モーラスもその中心メンバーであった⁹。

フランス本国で展開された「国民革命」はマルティニックの言論状況を知る上でも無

視できない。確かにマルティニックでは、言論を経済的に支えていた白人農園主（ベケ）の存在など、本国とは異なる構造によって言論が成り立っていた。しかし、「ロベール時代」の文化政策は本国で展開される「国民革命」を帝国である植民地にまで波及させることであり、本国の言論状況と当時のマルティニックの言論状況は「国民革命」という名のもとで同一平面上に置かれていたのである¹⁰。

この同一平面のもとにセゼールたちの活動を置くことで『トロピック』の特異性が見えてくる。すなわち、『トロピック』の刊行それ自体が「国民革命」を強く反映したものだ。急いで付け加えておくと、ここで言う反映とは「国民革命」を体現するという意味ではない。そうではなく、「国民革命」の下で行われた言論統制下でこそ生み出された言葉がこの雑誌には存在する、ということだ。ここで注目しておきたいのは、ヴィシー政権下のフランス本国においては、物資の窮乏を理由に新しい定期刊行物の出版が禁じられていたということである。『トロピック』創刊と同じ1941年にリヨンで創刊された雑誌『コンフリユアンス』は、戦前に創刊され戦争とともに休刊していた雑誌だと偽ることで検閲をパスしていた¹¹。『トロピック』刊行に関する証言資料が関係者の部分的な証言を除いて存在しないため、なぜこの雑誌が刊行できたのか現時点では明確な答えが出せない。ただ「国民革命」とその言論統制を意識したと考えられる点について、少なくとも二つ指摘することができる。

一つはセゼールたちが自身のメッセージを読者に直接伝えるのではなく、第三者からは理解が困難なイメージを動員することで伝えようとしていた、ということである。ケステロートはこのような言葉の用い方を「暗号としての言葉 *langage-code*」と表現した¹²。ヴィシー政権下のマルティニックでは言論が統制され、自由が著しく損なわれていた。そのような中、正面切って体制批判をするのはあまりに危険だ。ましてや当時のセゼールはリセの教師であった。ヴィシー政権下で最も注視されていた職業の一つは教師であった。イデオロギーの再生産に直接関わるからである。したがって雑誌記事として体制批判を堂々と明文化することはできなかつたろう。ではどうするのか。ケステロートによれば、ここで登場するのがシュルレアリスムの言葉遣いだ¹³。自分の言いたいこと、それを暗号のような難解な言葉遣いによって詩へと結晶化するのである。

もう一つは当時ヴィシー政権によって利用されていたシャルル・ペギーを持ち出している点である。『トロピック』第1号にはペギーの詩が4編掲載されており、それに先立って、セゼールによる序文が付されている。ペギーを持ち出すことは、ヴィシー政権下にあつては特殊な意味を持っていた。有田が指摘するように、ヴィシー政権下のフランス本国には「二種類の『ペギー主義』」が存在しており、ヴィシー政権によって利用されるペギー主義と、「30年代の非順応主義」の精神を引き継ぎヴィシー政権に抗するものとしてのペギー主義があつた¹⁴。セゼール自身、これら二つのペギーの受容のされ方を意識していたと考えられる。セゼールは『トロピック』創刊に先立って、1939年10月

26日の『アクション・ソシアリスト』第53号に「ペギーのメッセージ」と題した文章を掲載し「そして私はペギーについても語らないつもりだ。人がペギーを利用したようにはしないつもりだ」と述べている¹⁵。また1982年に行われたあるインタビューにおいて、セゼールは次のように述べる。「ペギーについての文章ですが、あれはあるペギー解釈に対して異議を申し立てるためのものです。彼に対して、持っている以上の重要性を付与すべきではありません。それに、私はそのような文章を全集に再録するつもりはまったくないのです¹⁶。」このように、セゼールがペギーを持ち出したのは当時の状況を強く反映してのことであった。

以上のように、「ロベール時代」の言論状況を特徴付けるのは「国民革命」というプロジェクトである。そして『トロピック』はこの「国民革命」が展開するマルティニックで刊行された雑誌であり、「ロベール時代」の言論状況を反映しつつ「文化的闘争¹⁷」を行っていた。

3. 「文化的闘争」から政治的闘争へ

『トロピック』が変化を見せるのは、ロベール体制崩壊から約半年後に刊行された第10号(1944年2月)からである。この第10号の冒頭を飾ったのは、セゼールによる「パノラマ」と題された文章であり、この「パノラマ」を機に、『トロピック』は「文化的闘争」から政治による闘争へと性格を変化させていく。それを端的に表しているのは、第11号(1944年5月)だ。この号は反ヴィシーの姿勢をあらわにしている。巻頭に置かれているのは、エティアンブルの「フランス的思考に反するヴィシー政権のイデオロギー」と題された文章である。タイトルからもわかるように、この文章でエティアンブルは、ヴィシー政権をフランス的なものの考え方とは異なるものとして描きだし、その非正当性を訴えている。また、この文章に次いで配置されたセゼールの文章は、「ロベール時代」に権力を得ていた教会を批判するものである。このように当初の目的であったロベール体制への抵抗が体制の崩壊という形で成し遂げられた後『トロピック』は政治化していく。同時にそれは具体的な政治的態度決定をとることも意味していた。とはいえどのような態度決定だったのか。実際にセゼールが書いた文章を検討しつつ論じてみよう。「パノラマ」は21の断章から構成されており、次のように開始される。

Ce pays souffre d'une révolution refoulée.

On nous a volé notre révolution.

*

la pire erreur serait de croire que les Antilles dénuées de partis politiques puissants sont dénuées de volonté puissante. Nous savons

このくには押し殺された革命に苦しむ。

私たちの革命は奪われた。

*

最悪な誤りは、力ある政党を持たないアンティル諸島を力ある意志の欠けたものであると思うことではなからうか。私

très bien ce que nous voulons.

私たちは私たちが望むものをよく知っている。

*

**

La liberté, la dignité, la justice, Noël brûlé.

自由、誇り、正義、焼かれたノエル¹⁸

*

**

la condition d'une renaissance ou d'une naissance : il faut le dire fortement : un bouleversement de l'économie et de la société. La *Quatrième République* doit être.

再生ないしは誕生の条件、そう、力強く言わねばならないのだ。経済と社会の転覆と。第四共和政が到来しなくてはならない。

まずセゼールの立場として打ち出されるのは、「革命」の側に立つ、という姿勢であり、ここで言う「押し殺された革命」とは「経済と社会の転覆」としての「第四共和政」の誕生ということになる。注目すべきは、セゼールはこの時点で来るべき体制としてフランス共和政の流れを採用しているということだ。ここで言われる「第四共和政」は1940年に終焉した第三共和政に続いて構想されるべき体制である（念頭に置かれているのは1946年に成立するフランス第四共和政と同じものではなく、あくまで第三共和政の次に来るものとしての第四共和政である）。思い起こすべきは、1848年の奴隷解放は共和政の下でなされたということである。他方、奴隷解放の立役者であったシェルシェールが植民地推進派であったことからわかるように、第三共和政下のフランスでは植民地の版図拡大が進められた。

とはいえ、セゼールにとって「第四共和政」への期待は植民地主義を肯定することではまったくない。このことをセゼールは次のように表現する。

Si la grande et saine colère du peuple vient (comme il y a un siècle) se jeter à la traverse, nous marchons tout droit au terme logique de 3 siècles d'histoire antillaise : le triomphe du *larbinisme* intégral.

もし民の偉大で健全な怒りが（1世紀前のように）食い止めることができないとしたら、私たちはまっすぐにアンティル諸島の3世紀にわたる歴史の当然の最終段階へと歩む。そう、完全な下僕根性の勝利。

引用箇所からうかがえるのは、セゼールにとって問題の鍵を握っているのは「私たち」であるということだ。「アンティル諸島の3世紀にわたる歴史の当然の最終段階」とは要するに、奴隷制と植民地主義の帰結、という意味であり、その帰結とは「下僕根性の勝利」だということ。では、「下僕根性」を断ち切るために植民地状況からの脱却としての独立が選択されるかということ、そうではない。いや、むしろセゼールの論理は独立とは反対の方へと向かっていく。

La Révolution martiniquaise se fera au nom du pain, bien sûr ; mais aussi au nom de l'air et de la poésie (ce qui revient au même).

*

Je dis que nous étouffons.

**

Principe d'une saine politique antillaise : ouvrir les fenêtres. De l'air. De l'air.

*

Par quoi je condamne toute idée d'indépendance antillaise.

マルティニック革命はもちろんパンの名のもとになされるだろう。だが同じく、(同じところに立ち戻るものではあるが) 空気と詩の名のもとにもなされるだろう。

*

私は言う、私たちは息詰まっていると。

**

アンティル諸島の健全な政治の原則、それは窓を開くこと。空気を。空気を。

*

かくして、私はアンティル諸島の独立というあらゆる思想を糾弾する。

一読して、最も目を引くのは「かくして、私はアンティル諸島の独立というあらゆる思想を糾弾する」という一文だろう。今日の目から見れば、「下僕根性」に至らぬようにするためには、従属と支配の関係を断ち切る必要がある。そのために従属と支配の関係を切断すること、つまり「独立」という形での脱植民地化へと論が進展しても何ら問題はないはずだ。だが、セゼールはそうには論を運ばない。「独立」という形でアンティル諸島以外の場所と手を切るのではなく、むしろ「窓を開く」ことを主張するのだ。

とはいえ、「窓を開く」というセゼールは、どこへ向かって窓を開くのだろうか。クンデラは私たちが先ほど引いた箇所を引用したうえで、窓が開かれる方向について論じている。クンデラによるならば、セゼールが窓を開くのはまずもって「フランス」、それも「革命」と「シェルシェール」、そして「ランボー、ロートレアモン、ブルトン」といった文化の国としてのフランスの方である。次いで、マルティニックの個性の奥底にある「アフリカという過去」へとセゼールは窓を開く。さらに、南北アメリカ大陸の間に位置するアンティル諸島そのものへとセゼールは窓を開く。このように「フランス」「アフリカ」「アンティル諸島」の三方向へとセゼールは窓を開く、とクンデラは指摘するのである¹⁹。1945年以降セゼールが行ったフランス、アフリカ、アンティル諸島をまたぐ活動を事後的に思い起こすならば、このさながら三角貿易をなぞるようなクンデラの指摘は異論の余地がないように見える。ただし、「パノラマ」が掲載された『トロピック』第10号以降、この雑誌が政治的性格を帯びてくることを確認した私たちにとって、そもそも問われねばならないのは「窓を開く」という行為そのものが持つ意味である。言い換

えるならば、1944年という時点でセゼールが「窓を開き」、「独立」を「糾弾」するのはなぜなのか、「糾弾」という厳しい言葉を使ってセゼールが「パノラマ」をしたための理由はなぜなのか、この点こそ私たちはいま問わねばならない。

4. 「パノラマ」における反「独立」の政治的意図

「パノラマ」における反「独立」について、巨視的な視点から見てみよう。「アンティール諸島の独立」というあらゆる思想を糾弾する」というセゼールの言葉そのものは、世代論的な観点に立つならば驚くに値しない。中村が言うように「政治の同化、文化の異化」という構図はネグリチュード世代のパラダイム²⁰だからである。アンティール諸島において「独立」という考え方が政治的な重要性を持つのは、セゼールの次の世代にあたるファンオンや、グリッサンらの世代である。時代でいうならば、アルジェリア独立戦争が起こった1950年代から1960年代にかけて「独立」が政治的選択の土俵に上がるようになる。このような世代論的な観点に立つならば、1940年代にセゼールの周辺で政治的な選択として「独立」が唱えられていたとは考え難い。確かに、仏領から英領に目を移すならば、英領のカリブ海の島々では1930年代にナショナリズム運動が高揚している。しかし、それも「独立」を叫ぶわけではなく、「地域の裁量を前提とした連邦化の設立」を目的としていた²¹。したがって、「独立」というスローガンがマルティニックで明確に意識され、言語化されるのは、上述の通りアルジェリア独立戦争以降であると考えるのが現時点では妥当だと言えよう。このような世代論によってセゼールの立場はある程度までは説明可能である。

次に、セゼールの「パノラマ」にピントを絞って反「独立」について考えてみよう。彼が「独立」の「糾弾」に先立って強調するのは「マルティニック革命」の必要性だ。「革命」については「パノラマ」冒頭部分からすでに述べられていた。「アンティール諸島が力ある意志の欠けたものである」と思われているが、実際には「私たちは私たちが望むものをよく知っている」のであり、決して「意志が欠けている」わけではない。したがって「革命」は可能であり、それは「第四共和政」の樹立という形で達成されるというのがセゼールの論の骨子である。先のクンデラの指摘に従うならば、この「革命」への志向は、革命の伝統を持つフランスと結びついている。こう言ってよければ、「革命」はあくまで「第四共和政」という形で成し遂げられるのであって、フランス本国と手を切ることによって達成されるのではない、ということだ。

世代論的な立場に立つ巨視的な視点と、「パノラマ」における「革命」をフランスが持つ革命の伝統と接続してとらえる微視的な視点、ここまでこの二つの面からセゼールの反「独立」論を考察してみた。しかし、これだけでは、セゼールが「独立」思想をここまで「糾弾」することの理由が示されたとは言えない。世代論的説明はあくまで事後的な説明であるし、クンデラがアンティール諸島の「革命」をフランスの革命の伝統に結び

つけているのも、性急すぎるという非難を免れないからだ。そこで、1944年2月に「パノラマ」をセゼールが書いた時、彼にはどのような社会的風景が見えていたのか考えてみよう。まず、マルティニク内部に目を向けた時、マルティニクにおいてフランス本国と距離をとろうとしていたのは、一般民衆ではなく、有産者階級であるベケたちだった。したがって独立した暁には、島内のベケ勢力が全権を掌握する危機感もあったのだ。セゼールが「パノラマ」において、ブルジョワジーを批判し、「独立」を否定する背景にはこのような社会的事情もあったのである。

次にマルティニクの外部に目を向けると、セゼールにとって「独立」を容易に主張できない様子がよりはっきりと見えてくる。アンティル諸島における「独立」の問題を考える際に、合衆国の存在は抜きにできない。要するに、合衆国と地理的に近い位置にあるマルティニクは、場合によっては合衆国の勢力下に置かれる恐れがあったのである。百年以上前の話ではあるが、1823年のモンロー宣言によって南北アメリカの中間に位置するカリブ海地域は合衆国の勢力圏にあった。1940年7月の第二回米州外相会議で発表されたハバナ宣言は、カリブ海地域の領土主権に重大な危機がおよんだ場合、これをアメリカ合衆国の行政下に置くことを宣言したものである。もちろん、この背景にはパナマ運河を中心とするカリブ海地域における合衆国の利権を守ろうとする目論見があった²²。合衆国が行ったのは覇権の誇示だけではない。1941年に発表した「大西洋憲章」は反植民地主義的な性格を表明していた。平野が言うように、「国際舞台での反植民地的な動き²³」をフランスもまた意識せざるをえなかったのである。

このような合衆国の勢力はフランス植民地であるマルティニクにとっても無縁のものではない。事実、高等弁務官として覇権されていたロベールが「ロベール時代」の間に行っていたのは合衆国にとって有利な条件を提示することで、アンティル諸島の植民地を物資の面で維持することであった²⁴。また、1942年5月から8月にかけてアンティル諸島をドイツ軍が利用することを恐れた合衆国が海上封鎖を行った結果、生活必需品の価格高騰がマルティニクを襲い、飢饉が生じた。このような合衆国の脅威は、セゼールが言う「マルティニク革命」にも影を落としていたと推測できる。アンティル諸島にとって、「革命」が意味するものは、クンデラが言うように奴隷制解放をもたらしたフランス革命の伝統に連なることであるだろう。だが同時に、そのフランスから独立することで多額の負債と合衆国による占領を被ったハイチ革命もまた含意されているのではないか。実際、セゼールは『帰郷ノート』の中でハイチを「最初にネグリチュードが立ち上がった」地として描いている。しかし同時に、同じく『帰郷ノート』にトゥサン・ルヴェルチュールの最期を書き込むことで、ハイチ革命の困難な行く末も描き出しているのである²⁵。

生き残ること、食べていくこと——それを妥協的な態度として否定する資格は誰にもない。「革命」へと人を突き動かすものは何か。セゼールによれば、それはまずもって「パ

ン」である。ここで言う「パン」とは生きる糧の喩であり、要するに、生きるために「革命」をするということだ。同時にセゼールは「空気と詩の名のもとにもなされるだろう」と言う。これは、私たちにとって最も重要な一文だ。なぜならば、セゼールは「空気」という言葉を持ち出すことで、巧みに「独立」という考え方を退けているからである。どういふことか。セゼールは次のように続ける。「私たちは息詰まっている」、「窓を開くこと」そして「空気を、空気を」と。「窓を開くこと」や「空気」といった言葉を用いることで、セゼールの論はアンティル諸島を開くことの重要性へと進んで行く。ここで対立軸として想定されているのは、「アンティル諸島の独立」、すなわち「窓」を閉ざし、自閉的になることだろう。このように、セゼールは周到に「空気」や「窓を開くこと」と「革命」を結びつけておき、それを反「独立」の方向へと持って行くのである。この反「独立」について、セゼールは続く箇所では「マルティニックの、望まれた、計算された、感情的であるのと同じくらいに理性で考えられた依存」と言い換えている。「独立 *indépendance*」ではなく「依存 *dépendance*」を選ぶ、しかし、その「依存」は「望まれ」、「計算され」、「理性で考えられ」ているということだ。ここに読み取るべきは、合衆国の覇権およびハイチの独立とその後の貧困状態を考慮した際にいかに「独立」がアンティル諸島の植民地にとって困難な道であるか、ということではなかろうか。言い換えるならば、「独立」よりも「依存」の方が「理性」的であるのは、ハイチ革命や同時期の合衆国の動向を考えるならば、「独立」がもたらす弊害の方が多いと考えてのことであろう。このような政治的な態度決定に、後にセゼールが成立させた県化法案の姿を予見することは容易い。別言するならば、「パノラマ」において政治的なものが反「独立」という具体的な形を伴いつつ上昇している様子を私たちは見ることができるのである。そして、この政治的なものの上昇において問題となるのが、「パン」の問題、すなわち生きていくという具体的な問題であったことが 1940 年代の合衆国の覇権とハイチに目を向けることで見えてくるのである。ここまで述べてきたのは、セゼールが言う反「独立」の政治的側面であった。この「独立」と反「独立」をめぐる議論は、後に「独立の権利」という形で「止揚」されることになるだろう。晩年のセゼールはあるインタビューにおいて次のように語っている。

私はマルティニックのようなくにのために、独立の権利を要求する。これは必ずしも独立でなくても良い。というのも、マルティニックの人々はそんなことは望んでいないし、そんな手段も資源も持っていないということを知っているからだ。しかし、それは試みられうる。私たちは独立派ではないが、独立の権利を有している²⁶。

1944 年のセゼールと半世紀以上経た晩年のセゼールとを同じ地平で考えるのはアナ

クロニズムである。しかし、「手段も資源も持っていない」ということ、そして「必ずしも独立でなくても良」く、重要なのは「独立の権利」であるという姿勢は、一段階進んではいるが、「独立」へとラディカルに突き進まないという点においてこれまで見てきた1944年のセゼールの姿勢と地続きのものである。こう言ってよければ、1944年の反「独立」のうちに、未生の政治家エメ・セゼールの姿がすでに兆しているのである。

5. 空気と詩

とはいえ、セゼールが言う「窓を開くこと」は単なる政治的な要求としてあるだけではなく、一つの詩学が要請するものでもあったのではないか。セゼールは次のように書いている。「マルティニック革命はもちろんパンの名のもとになされるだろう。だが同じく、(同じところに立ち戻るものではあるが)空気と詩の名のもとにもなされるだろう。」これまで、「パノラマ」の政治的側面にばかり目を向けてきたが、「マルティニック革命」は「パン」だけではなく、「空気と詩の名のもとにもなされるだろう」とセゼールはいつているのである。ではセゼールの想像力の中で「空気」と「詩」はいかなる関係を取り結び、「革命」をもたらすのか。

ここで指摘しておきたいのは、セゼールが「空気」を意味する *air* という言葉を用いたのは「パノラマ」が初めてではない、ということだ。実は1941年の『トロピック』第1号に掲載された「詩篇断章」においてもセゼールは「空気」という語を用いていた。

Et j'entends l'eau qui monte,	そして、私は聞く、水が昇ってくるのを
la nouvelle, l'intouchée, l'éternelle,	新しい、触れられたことのない、永遠の水が
vers l'air renouvelé.	再び新しくされた空気の方へ

Ai-je dit l'air?	私は空気と言ったね? ²⁷
------------------	--------------------------

引用した箇所は「詩篇断章」の冒頭近くであり、「沈滞」や「悪臭」に対するアンチテーゼとして「錯乱の澄明な罅割れ」が「祝福」された直後の箇所である。ここで言う「錯乱」とはケステロートが言う「暗号としての言語」に通じるものであり、理性や論理の軌から逸脱する詩的言語のことであろう²⁸。ここで否定されている「沈滞」や「悪臭」をどのように解釈したらよいだろうか。ここでは二つの意味が「沈滞」や「悪臭」に込められていると解釈してみたい。一つは奴隷制の歴史であり、もう一つはヴィシー政権下にある、という意味である。もちろん、「詩篇断章」の中に奴隷制の歴史やヴィシー政権に対する批判が直接書き込まれているわけではない。しかし、「沈滞」や「悪臭」に奴隷制とヴィシー政権への批判的態度を読み込む根拠として、1945年1月に刊行された『トロピック』第12号にセゼールが掲載した「マルティニック総督、ジョルジュ・ルイ＝ポントン」という文章を提示することができる。というのも、この文章の中でセゼール自

身が「ロベール時代」を「不振」や「腐った卵の臭い」によって描き出し、しかもその「ロベール時代」に奴隷制への後退の危機を読み取っているのである。「マルティニック総督、ジョルジュ・ルイ＝ポントン」は、自由フランスから派遣されたポントン総督の死に寄せた追悼文である。この中には、「ロベール時代」が単にヴィシー政権による支配を意味していただけでなく、奴隷制の歴史をマルティニックの人々に思い起こさせるものでもあったことが次のように述べられている。

彼は私たちのうちにやって来た。私たちにとって最も忌まわしい頃のことで。マルティニックが放擲されていた4年間、この土地はすべてを被ってきたのだ。いつまでも続く飢餓、サディスティックな警察、知的なものは孤立していて、それを愚かな検閲が見張り、(中略)私たちの民を骨抜きにしてやろう、愚民にしてやろう、侮辱してやろう、奴隷制の暗い日々、動物としてみなされる暗い日々へと感じられないほど少しずつではあるが後退させようという実に明白な意志²⁹。

セゼールにとって、「ロベール時代」は抑圧的な政権による統治に単純に還元できるものではないことが上の引用からわかる。むしろ、ヴィシー政権による統治の背後にセゼールは奴隷制への後退を読み取っていたのである。換言するならば、ヴィシー政権による支配と奴隷制の歴史は地続きのものとして彼の目に映っていた。その時見えていたものを言語化する際に用いられたのが「沈滞」や「悪臭」だったのだ。メニルは「『トロピック』は40年代におけるアンティル諸島の革命的左翼の展望、希望、意志の表現であった³⁰」と回想しているが、「詩篇断章」における「空気」はまさしくそのような「希望」が詩の言葉によって表現されたものだと言えるだろう。

作成年代やその状況が異なる以上「詩篇断章」と「パノラマ」を単純に比較することはできないが、「パノラマ」における「空気」もまた奴隷制と植民地主義の歴史の帰結としての「下僕根性」に対置されるものだ。ただし「パノラマ」において「詩」は単なる非理性の言葉ではなく、政治的態度決定と切り離すことのできない何ものかになっている。それは何か。

ここでヒントとなるのは、「パノラマ」が『トロピック』に掲載された一ヶ月後に『マルティニック』誌に発表された「魔術師への呼びかけ」における「詩」の重要性である。「アンティル文明のためのいくつかの言葉」という副題が示すように、「魔術師への呼びかけ」の主題は「文明」である。セゼールは次のように書いている³¹。

Les vraies civilisations sont de saisissements poétiques : saisissement des étoiles, du soleil, de la plante, de l'animal, saisissement du 真の諸文明は詩的な衝撃からできる。そう、星々、太陽、植物、動物の衝撃、丸い地球、雨、光、数の衝撃、生の衝

globe rond, de la pluie, de la lumière, des 撃、死の衝撃だ。
nombres, saisissement de la vie, saisissement
de la mort.

上に引用した「真の諸文明」は「詩的な衝撃」に由来する、というセゼールの考えはフロベニウスの文明観、すなわち、「パイデウマ」という力をもたらす「衝撃」が「文明」を作る、という考え方と近似している³²。『トロピック』第1号において、シュザンヌ・セゼールはフロベニウスの文明観を紹介しているので、この紹介文を踏まえつつ「真の文明」と「詩的な衝撃」をめぐるフロベニウスの議論を整理し、フロベニウスがセゼールに与えた影響を確認しておこう。ドイツ人アフリカ研究者フロベニウスが1933年にドイツ語で発表した『アフリカ文化の歴史 *Kulturgeschichte Afrikas*』のフランス語版は1936年にガリマール社から『アフリカ文明の歴史 *Histoire de la civilisation africaine*』として刊行された³³。フロベニウスがこの書物で行っているのは文化の「形態学」と彼が呼ぶもので、相異なる複数の文化を水平的に比較することによって浮かびあがる文化相互の共通性、およびその共通性が描き出す布置としての「文明」が論じられている。フロベニウスはこの「文明」を生み出すものとして「パイデウマ」という概念を用いている。シュザンヌのフロベニウス紹介文においても、「文明」は「パイデウマ」という「空恐ろしい力」によって生み出されるものだと言われている。さらに、「パイデウマ」の表出は「衝撃 *saisissement*」として人々に受け取られる、とシュザンヌは言う。「衝撃」と訳した *saisissement* という語は、不意に何かによって心を驚掴みにされる「ショック」や「衝撃」を表すが、同時に *saisir* (掴む、把握する) という動詞を名詞にしたものでもあるため、「掴むこと」や「把握すること」という能動性も含意する。ここでは、*saisissement* を、外界である世界と対峙した時に人間を襲う「衝撃」であると考えた。シュザンヌはフロベニウス論の中でそのような「衝撃」について次のように語っている。「季節の移り変わりが自然の周期的な生と死のリズムという衝撃を引き起こした時、新しい『生の感情』が生まれた。人間は、個人の存在と自らの運命の問題を意識した。この時、その運命とは自己を外界の中で孤立した現実として人間が経験する衝撃である³⁴。」このように、「衝撃」は移りゆく季節のように人間の力ではどうにもならないものに対し人間が対峙した時に襲ってくるものである。フロベニウスによれば、「パイデウマ」という力をもたらす「衝撃」が人間を通して「文化」として姿を表すことで「文明」は形作られていく。

話を「魔術師への呼びかけ」に戻すと、「真の諸文明は詩的な衝撃からできる」というセゼールがここで念頭に置いている「諸文明」は、「衝撃」に由来するものであり、そのような文明観は、これまで見てきたことを踏まえるならば、フロベニウスの文明観と近似している、と言えるだろう。セゼールの文明観に特異な点があるとしたら、「衝撃」を説明する際にセゼールは「詩的な衝撃」という言葉を用いていることだ。フロベニウスとの近似性から推測するならば、人間の力ではどうにもならない度外れなものに対して

「詩的」という言葉があてがわれていると考えることができるだろう。ところで、これまで私たちが解読の対象としてきたのはまずもって「暗号としての言葉」としての詩であった。もう一度ケステロートの言い方をさらうならば、「暗号としての言葉」とは直接言い表せないものを迂回しつつ言い表すための戦術である。したがって、そのような言葉で書かれた詩とはまずもって戦術としての詩、具体的に言えば、文脈を共有する者同士の間では政権に対する批判としても機能するような詩であるといえよう。メニルは後に、『トロピック』の読者であった40年代の学生たちは『行間を読む』こと、空白や沈黙を埋め合わせること、象徴、省略、反語を解釈することが必要だと知っていた³⁵と回想している。「40年代」とあるが、引用箇所の前直前を読むとそれがロベール時代を指していることがわかる。したがって、このメニルの回想はロベール時代には「暗号としての言葉」で書かれた詩が、「解読」されるべきもの、あるいは「解釈」されるべきものだったことを言い表している。しかしである。先に見たように、1944年にセゼールが発表した「魔術師への呼びかけ」における詩的なものの位置付けはもはや人間の解釈を超えた何ものかになっている。急いで付け加えておくと、「暗号としての言葉」から人間の解釈を超えた「詩的な衝撃」へとセゼールにとっての「詩的なもの」が変化した、と強調したいのではまったくくない。私たちの目的は、あるものから別のものへの変化という単線的な構図へと「詩的なもの」を還元することではまったくくないからだ。むしろ私たちがここで強調したいのは、こうである。「ロベール時代」の軛から解放された1944年のセゼールにとって、詩的なものとは、あたかも「パイデウマ」が「文明」を生み出す力であったのと同じように、戦後作り上げていくべき新たな世界を生み出す力として意識されているのではないか。逆に言うならば、「詩的なもの」が立ち上がる時、新たな世界のヴィジョンもまた生み出されることになる。

このように、「魔術師への呼びかけ」にまで視野を広げることによって見えてくるのは、セゼールが「マルティニック革命」という言葉で言わんとしていることは、単に政治の次元に属するものではない、ということだ。むしろ、「マルティニック革命」にかけられているのは、物質的な水準の向上（パン）だけでなく、「文明」を持つ存在としての「民」の質的な成熟（空気と詩）である。

畢竟、セゼールが「パノラマ」で浮き彫りにしようとするのは「ロベール時代」の後にやってくる共和政の樹立（＝「革命」）の必要性和そこに信頼を置く政治的な態度決定であるが、同時に「下僕根性」を廃止しうる「民」の質的な成熟が不可欠であるということだった。とりわけ後者は、セゼールにおける（アフリカ研究を経由した）文明観と結びついており、その際に重要視されるのが「詩」であった。このように「パノラマ」においてセゼールは反「独立」という極めて具体的な政治的な態度決定を表明しつつ、そこに物質的な与件に縛られない詩的なものを重ねていくのである。ここにおいて詩的なものと政治的なものは切り離されることなくセゼールの思想を形成しているのである。

6. おわりに

まとめよう。『トロピック』は「ロベール時代」に生まれ、「国民革命」の名のもとで行われた言論統制をかい潜りつつ「希望」を表明した雑誌であった。そして、「ロベール時代」が終焉した後、来るべきアンティル諸島の姿を政治的なものと詩的なものの双方から構想したのである。すなわち、「ロベール時代」の終焉は単なる解放ではなく、新たな政治体制の構築へと「民」が駆り立てられることもまた意味していたのだ。そのような中で発表された「パノラマ」は政治的なものと詩的なものが一つの態度決定として立ち上がっている文章であり、そこにおいてセゼールは政治的なものと詩的なものを現実と理想のように分離するのではなく、両者を相即不離の関係に置いている。しかも、ここで言う政治的なものとはマルティニックの政治的ステータスをめぐるものであり、実際にこの文章が発表された2年後、政治家セゼールの手によって県化法案という形で具体化されることになる。「空気」を求めて窓を開いたマルティニックは、植民地というステータスから県へと昇格することになったのだ。もっとも県化の試みは、本土の政治家たちによって早々に裏切られ、実現が先延ばしされることを私たちは後に知るだろう。ともあれ、これまで顧みられることが少なかった「パノラマ」は詩人・政治家エメ・セゼールの出来を予感させる文章であり、この意味において無視できないものである。

はじめに述べたように 1940 年代前半のセゼールをめぐる議論はまだ十分になされていない。本稿は「パノラマ」の分析を通して 40 年代のセゼールに迫ったが、新資料の発見も含めて、より多角的な議論が不可欠だ。例えば『トロピック』を刊行するにあたってセゼールとともに思想形成を行ったシュザンヌやメニルといったセゼール以外の書き手についても、本論で素描した詩的なものと政治的なものの上昇は認められるのだろうか。このような疑問に答えるべく今後の研究を行うつもりである。

註

- ¹ 2013年11月6日から2014年1月24日までマルティニック県立文書館で行われた展覧会は「セゼール、ポエジーとポリティック Césaire, poésie et politique」と題されており、まさにセゼールにおける詩的なものと政治的なものを資料から明らかにしようとする意図に貫かれていた。この展覧会のカタログは次の通りである。Aimé Césaire, *poésie et politique*, catalogue de l'exposition organisée par les Archives départementales de la Martinique du 6 novembre 2013 au 24 janvier 2014.
- ² セゼールについて、詩的なものと政治的なものの連関を克明に明かした研究の一例として尾崎文太の博士論文を挙げることができる。尾崎文太「エメ・セゼールの戯曲作品と政治思想：1940年代から1960年代まで」、一橋大学言語社会研究科2008年度博士論文。
- ³ 「ロベール時代」についてはジェニングズによる歴史研究がある。Éric T. Jennings, « La dissidence aux Antilles », *Vingtième siècle. Revue d'histoire*, n° 68, octobre-décembre 2000, p. 55-71.

また、セゼールたちが刊行していた『トロピック』についてはケステロートが自身の博士論文で1章を割いている。Lylian Kesteloot, *Les Écrivains noirs de langue française: Naissance d'une littérature*, Université Libre de Bruxelles, Institut de Sociologie, 1963. ただし、ケステロートの分析は文学的文章に限定されている。註1で述べた展覧会のカタログにおいても『トロピック』に照明をあてたページがあり、そこに付された解説は1頁と短いながらも、上記の先行研究を踏まえた高水準の解説である。

- 4 本稿執筆者は2017年3月にマルティニック県立文書館で「ロベール時代」に関する資料調査を行った。本稿はこの調査の成果が反映されている。
- 5 本稿で引用した「パノラマ」の典拠は次の通りである。Aimé Césaire, « Panorama » in *Tropiques : 1941-1945*, collection complète, Jean-Michel Place, 1978, n° 10, p. 7-10.
- 6 例えば、René Hénane, « Les armes miraculeuses » d'Aimé Césaire : une lecture critique, L'Harmattan, 2008.
- 7 管見の限りでは、本論中で扱ったクンデラの論考を除き、「パノラマ」についてなされた唯一のまとまった研究は2013年に刊行されたセゼール作品集に収録されたアーノルドによる「パノラマ」の解説文である。この解説文においてアーノルドは「パノラマ」が掲載された『トロピック』第10号に収録された他の記事がマルティニックの動植物や黒人の民話に関するものであることに注目し、「パノラマ」の文化的寄与としての側面に重点を置いている。アーノルドの主張は『トロピック』第10号の編集方針を明らかにしており一定の説得力を持つてはいるが、第10号に続く『トロピック』の性格の変化を視野に入れるならば、「パノラマ」を第10号の性格だけに帰して良いものか疑問が残る。Aimé Césaire, *Poésie, Théâtre, Essais et Discours*, édition critique, coordinateur : Albert James Arnold, CNRS et Présence Africaine, 2013, p. 1361-1364.
- 8 川上勉『ヴィシー政府と「国民革命」——ドイツ占領下フランスのナショナル・アイデンティティ』藤原書店、2001年、45頁。
- 9 ヴィシー政権の思想的支柱は4年間で大きく変化した。モーラスら「古典的右翼」はそのような支柱の一つに過ぎない。大井孝『欧州の国際関係 1919-1946——フランス外交の視点から』たちばな出版、2008年、729頁。
- 10 ヴィシー政権によるプロパガンダと植民地政策について研究している松沼美穂は、「国民革命」を蝶番として本国と植民地(帝国)の紐帯が維持された点について次のように述べている。「ヴィシー新体制建設の柱の一つに位置づけられた、本国と帝国の結合とは、ドイツの攻撃を受けて崩壊に瀕したフランスを刷新する構想である「国民革命」を、その震源地である本国から遠く離れ、体制の変動を必然と感じさせる占領軍ドイツの影もペタンというカリスマの姿もない海の向こうへ、移植していくことを意味した。」松沼美穂『帝国とプロパガンダ——ヴィシー政権期フランスと植民地』山川出版社、2007年、27頁。
- 11 重見晋也『『コレージュ・スピリチュエル』としての『ボードレール』』『名古屋大学文学部研究

論集 文学』第 61 号、2015 年、118 頁。

- ¹² Lylian Kesteloot, *Les Écrivains noirs de langue française: Naissance d'une littérature*, op. cit., p. 232.
- ¹³ セゼールにとっての「詩的なもの」と「政治的なもの」をめぐる問いが、ブルトン、あるいはシュルレアリスム全般にとっての「詩的なもの」と「政治的なもの」をめぐる問いとどのような関係を持っているのか、という問題については別稿で論じるつもりである。先行研究として以下の論文を参照されたい。Michel Hausser, « *Tropiques* : une tardive centrale surréaliste? » in *Mélusine*, n° 2, L'Âge d'Homme, 1981, p. 238-259. 1940 年代にシュルレアリストたちが取り組んだ「驚異」や「ユーモア」といったテーマと『トロピック』の関わりについては次の論文が詳述している。星埜守之「カリブ海とシュルレアリスム——エメ・セゼールと『トロピック』を巡って」、塚本昌則、鈴木雅雄（編）『〈前衛〉とは何か？ 〈後衛〉とは何か？——文学史の虚構と近代性の時間』平凡社、2010 年、507–520 頁。上記二つの先行研究はシュルレアリスムと『トロピック』をめぐる研究である。他方で、上述の問題は、セゼールがパリに留学していた 1930 年代にまで遡って考察する必要があるだろう。ケステロートは 1932 年にパリでメニルら黒人学生によって刊行された『正当防衛』について論じる中で、シュルレアリスムが同化主義や伝統的なアカデミズムに対する対抗措置となった点を指摘している。Lylian Kesteloot, *Les Écrivains noirs de langue française: Naissance d'une littérature*, op. cit., p. 44-52.
- ¹⁴ 有田英也「1930-40 年代の『ペギー主義』——エクリチュールのポリティック」『仏語仏文学研究』第 3 号、東京大学仏語仏文学研究会、1989 年、71-74 頁。
- ¹⁵ 「ペギーのメッセージ」は 2013 年に『レ・タン・モデルヌ』誌で再掲された。セゼールがペギーについて述べる際に、右翼に対する防衛策をとっていることは、この再掲の際に付された脚註に基づく。Aimé Césaire, « Le message de Péguy » in *Les Temps Modernes*, n° 676, mai 2013, p. 252-255.
- ¹⁶ « Entretien avec Aimé Césaire, Paris 1892 » in Jacqueline Leiner, *Aimé Césaire, le terreau primordial*, Gunter Narr Verlag Tübingen, 1993, p. 131.
- ¹⁷ « Entretien avec Aimé Césaire par Jacqueline Leiner » in *Tropiques*, op. cit., p. VIII.
- ¹⁸ 「焼かれたノエル」とは何を意味するのだろうか。これが何を意味するのか現時点では確信が持てない。仮説として私見を述べるならば、文脈上、「私たちが望むもの」の具体的な例として「自由、誇り、正義、焼かれたノエル」が提示されているように読むことができる。「ノエル Noël」はキリストの誕生（およびその祭）を意味するものであり、語源的には誕生と結びついている (FEW7, 37 a natalis, および *Dictionnaire Gaffiot*, p. 1013 を参照した)。「焼かれたノエル」とは、火による破壊と誕生が結合したものである。続く文章で「経済と社会の転覆」としての「第四共和政」の到来が述べられていることを考え合わせるならば、「焼かれたノエル」もまた、破壊と新たなものの誕生を意味するのであり、そのようなものとしての「革命」の喩ではなかろうか。とはいえ、これは一つの解釈の域を出ない。

- ¹⁹ Milan Kundera, « Beau comme une rencontre multiple » in *L'Infini*, n° 34, 1991, p. 57.
- ²⁰ 中村隆之『カリブー世界論——植民地主義に抗う複数の場所と歴史』人文書院、2013年、161頁。
- ²¹ 尾崎文太「エメ・セゼールの戯曲作品と政治思想：1940年代から1960年代まで」前掲論文、73頁。
- ²² Paul Butel, *Histoire des Antilles françaises*, coll. tempus, Perrin, 2007, p. 462-463.
- ²³ 平野千果子『フランス植民地主義と歴史認識』岩波書店、2014年、39頁。なお、「パノラマ」の発表と同じ頃行われたブラザヴィル会議では合衆国の動向とヴェトミンを代表とする民族主義運動に対する措置として、「植民地における自治」を認めないことが表明された。
- ²⁴ Armand Nicolas, *Histoire de la Martinique : de 1939 à 1971*, t. 3, L'Harmattan, 1998, p. 18-21. および、宮下雄一郎『フランス再興と国際秩序の構想——第二次世界大戦期の政治と外交』勁草書房、2016年、134頁。
- ²⁵ Aimé Césaire, « Cahier d'un retour au pays natal » in *Volontés*, n° 20, août 1939, p. 32-33.
- ²⁶ Aimé Césaire, *Nègre je suis, nègre je resterai : Entretiens avec Françoise Vergès*, Albin Michel, 2005, p. 33.
- ²⁷ Aimé Césaire, « Fragments d'un poème » in *Tropiques*, *op. cit.*, n° 1, p. 10.
- ²⁸ セゼールは1942年4月『トロピック』第5号に掲載した「文学宣言に代えて」の中で「狂気folie」を肯定的な力として描き出している。この文章は1947年ニューヨークで刊行された『帰郷ノート』プレンターノ社版にも書き加えられ、セゼールの詩において非理性、非合理性が持つ重要性を浮き上がらせている。
- ²⁹ Aimé Césaire, « Georges-Louis Ponton, gouverneur de la Martinique » in *Tropiques*, *op. cit.*, n° 12, p. 153.
- ³⁰ René Ménéil, « Pour une lecture critique de *Tropiques* », in *Tropiques*, *op. cit.*, p. XXXIV.
- ³¹ Aimé Césaire, *Écrits politiques : 1935-1956*, édition présentée et établie : Édouard de Lépine, édition présentée : Marc Césaire, Jean-Michel Place, 2016, p. 45.
- ³² Aimé Césaire, *poésie et politique*, *op. cit.*, p.19.
- ³³ Léo Frobenius, *Histoire de la civilisation africaine*, traduction : D^r H. Back et D. Ermont, Gallimard, 1936.
- ³⁴ Suzanne Césaire, « Léo Frobenius et le problème des civilisations », in *Tropiques*, *op. cit.*, n° 1, p. 34.
- ³⁵ René Ménéil, « Pour une lecture critique de *Tropiques* » in *Tropiques*, *op. cit.*, p. XXV.

